

Parametric variations in A-movement between Subject-prominent languages and Focus-prominent languages

著者	三上 傑
内容記述	Thesis (Ph. D. in Linguistics)--University of Tsukuba, (A), no. 5972, 2012.3.23 Includes bibliographical references (leaves 197-211)
発行年	2012
URL	http://hdl.handle.net/2241/117521

氏 名 (本籍)	^み 三 ^{かみ} 上 ^{すぐる} 傑 (青 森 県)
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5972 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	Parametric Variations in A-Movement between Subject-Prominent Languages and Focus-Prominent Languages (主語卓越言語・焦点卓越言語間の A 移動に関するパラメータ的相違)
主	査 筑波大学教授 博士 (言語学) 加 賀 信 広
副	査 筑波大学教授 Ph. D. (言語学) 竹 沢 幸 一
副	査 筑波大学教授 文学博士 廣 瀬 幸 生
副	査 筑波大学准教授 博士 (言語学) 島 田 雅 晴
副	査 筑波大学准教授 博士 (言語学) 和 田 尚 明

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、主語卓越言語 (Subject-prominent language) と焦点卓越言語 (Focus-prominent language) における諸構文の考察を通して、そこで観察される A 移動の非対称性を明らかにし、それを原理とパラメータの枠組みの下で適切に捉えようとするものである。この目的を達成するために、本論文では、Miyagawa (2005, 2007, 2010 など) による一連の研究を踏まえ、(1) に示した Tense の EPP 素性に関するパラメータを提案した上で、言語間における A 移動の非対称的な振舞いは、当該言語における T の EPP 素性の特性によりもたらされると主張する。

- (1) 当該言語の T (ense) がもつ EPP 素性が ϕ 素性と連動するか、あるいは、焦点素性と連動するかにより、その言語は主語卓越言語あるいは焦点卓越言語に分類される。

そして、本論文では、このパラメータの妥当性に関して、主に英語と日本語の比較統語論研究を通して経験的な立証を行う。

(1) のパラメータによれば、英語は T の EPP 素性が ϕ 素性と連動する主語卓越言語に分類される。このタイプの言語においては、T の EPP 素性は T との一致関係を確立する要素、すなわち主語を常に TP 指定部へ A 移動させるため、その位置は「主語位置」として機能することになる。したがって、たとえば英語の場所要素倒置構文 (LIC) において、主語が文末位置に生起し、「主語位置」が場所要素 (非主語) によって占められているように見える場合でも、主語卓越言語が有する T の EPP 素性の特性により、その位置は主語によって占められていなければならない。そこで、本論文では、コピー理論の枠組みの下、LIC では主語が音声形式の段階で下位コピーが発音されるため文末位置で具現することになるものの、統語論の段階では、通常的主語と同様に、TP 指定部に A 移動を起こしていると分析する。

これに対して、日本語は T の EPP 素性が焦点素性と連動する焦点卓越言語として位置づけられるが、このタイプの言語における T の EPP 素性は、主語・目的語といった文法関係とは独立した形で、焦点 (または、話題) として機能する要素を TP 指定部へ A 移動させることになる。したがって、TP 指定部は、主語だけ

でなく非主語によって占められることも原理的に可能であり、「主語位置」よりは「主題位置」として機能することになる。本論文では、A と A' の両方の特性を示すとされる日本語の中距離スクランプリングだけでなく、A' 特性のみを示すとされてきた長距離スクランプリングにおいても A 特性を示す場合があると指摘した上で、この日本語のスクランプリングが示す特異性は、焦点卓越言語における T の EPP 素性の特性から生じると提案する。

本論文は 11 章から構成される。

第 1 章では、本論文の目的と構成が述べられる。

第 2 章では、本論文の主張・分析を提示する前に、一致理論や移動のコピー理論などの理論的道具立てを導入する。そして、Miyagawa (2005, 2007, 2010 など) による一連の研究を踏まえた上で、主語卓越言語と焦点卓越言語間での A 移動の非対称性を説明するパラメータを提案する。

第 3 章から第 5 章までは第 I 部を構成し、英語の「文体的倒置文」で観察される A 移動を分析し、主語卓越言語における A 移動の本質を探る。まず、第 3 章では、英語の LIC を取り上げ、この構文では、主題 (Theme) 項が統語論の段階で場所項を越えて TP 指定部へ A 移動し、一方、場所項は話題化を介して TopP 指定部へ A' 移動を起こすとする分析を提案する。

英語の重名詞句移動構文を取り上げる第 4 章では、重名詞句主題項は、通常の主語項と同様に、統語論の段階で非主題項を越えて A 移動を起こすものの、その焦点要素としての性質上、基底生成位置にある下位コピーが音声形式の段階で具現すると主張する。

第 5 章では、英語における名詞句からの外置を取り上げ、名詞の補部として機能する前置詞句は、音声形式の段階で下位コピーが具現するために「外置」を起こすのに対し、付加詞として機能する前置詞句の外置は、排出 (Spell-Out) の際に後併合を介して強位相に直接付加することで派生されると主張する。

次に、第 II 部を構成する第 6 章と第 7 章では、日本語の存在文および中距離・長距離スクランプリングについて議論し、焦点卓越言語における A 移動の本質を探る。まず、第 6 章では、日本語の存在文を取り上げ、主語の主語項が焦点要素として機能するか否かに応じて、主題項が焦点要素として機能する場合には、T の EPP 素性の要請を満たすために TP 指定部へ A 移動するのに対し、そうでない場合には、非主語の場所項が TP 指定部へ移動すると主張する。

第 7 章では、日本語の長距離スクランプリングを取り上げ、まず、多くの先行研究の見解とは異なり、A 移動の特性を示す場合もあると指摘する。その上で、スクランプリングを起こす要素が焦点要素として機能する場合には、その要素は TP 指定部に A 移動するのに対して、前置する要素が焦点要素として機能しない場合には、TP 指定部よりも高い位置への「コストのかからない」A' 移動を受けていると主張する。

第 8 章から第 10 章までは第 III 部を構成し、ここでは、第 I 部および第 II 部で扱われた各構文と関連する諸構文について議論し、本論文で提案した分析のさらなる妥当性を立証する。第 8 章では、英語における Be 越え前置構文を取り上げ、LIC との多くの共通点に注目した上で、LIC の分析が援用できることを示す。

第 9 章では、英語の Wh 主語構文を取り上げ、主語卓越言語の特性により Wh 主語は CP 指定部に移動しているものの、経済性の観点から TP 指定部を占める下位コピーが音声形式の段階で具現すると主張する。

第 10 章では、日本語における所有文を取り上げ、所有者項と主題項への格付与のメカニズムに関して、T との複数一致を介して構造格が付与されるという「構造格」分析を提案する。

第 11 章では、本論文の主張がまとめられ、本研究の今後の展望と残された課題が述べられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、英語と日本語に見られる A 移動の振舞いの差異を、単に日英語比較の観点からではなく、主

語卓越言語と焦点卓越言語という大きな類型論的パラメータを仮定し、その中で最新の統語理論の道具立てを駆使することにより詳細な分析を行った意欲的な研究である。

英語の分析においては、場所要素倒置構文など「文体的倒置文」としてまとめられる文型を取り上げ、意味上の主語が文末に生起し、場所要素などが統語的主語位置を占めるとする、これまで優勢であった諸研究を反駁した上で、そのような倒置構文でも、主語卓越言語である英語では、意味的主語が統語的主語位置に必ず移動するとの新たな提案を行っている。この分析が可能となるのは、移動に関して最新のコピー理論を採用し、音声形式で具現するのは必ずしも上位コピーではなく、下位コピーの場合もあるとの見解に立つためであるが、このことにより、右移動操作などの理論的に好ましくない道具立てを用いることなく、英語の倒置構文の諸特性を自然な形で説明できることになったと言える。さらに、Wh 主語構文に関する「空移動仮説」をめぐる問題に独自の解決策を示した点も併せて、本論文は、英語の理論的構文研究に多大な貢献をなすものと高く評価される。

日本語に関しては、本論文の分析は、三上章の「主語廃止論」等で指摘された「主題言語」としての日本語の特性を理論的に導出する試みと見ることができる。日本語に見られる「語順の自由度」と「主題性」を理論的に絡める本論文の考え方はたいへん興味深く、この分野における今後の研究に一定の影響をもつ可能性がある。また、長距離スクランブリングに関する新たな事実の指摘や所有文の「構造格」分析など、独自性のある提案も行われており、この面での貢献も特筆に値する。

以上のように、本論文は、類型論的パラメータを踏まえた日英語比較研究と、英語および日本語における諸構文の理論的研究の双方に関して、顕著な貢献をなすものとして高く評価することができる。

ただし、本論文に今後に残された課題がないわけではない。本論文で仮定された類型論的パラメータは Miyagawa (2005, 2007, 2010 など) の一連の研究に拠る部分が多いが、一致素性と焦点素性を対比的に捉えるその基本的な考え方の妥当性については必ずしも学界の見解が一致しているとは言えない面があり、さらなる検証が必要である。また、本論文の議論は、ほぼ日英語の二言語に限られたものになっているが、当該類型論的パラメータの妥当性を示すためにも、諸々の言語について移動現象の振舞いを広く観察し、理論的な考察を行うことが必要である。もちろんこれは、今後の課題として取り組むべきことであり、本論文の価値を何ら損なうものではない。

平成 24 年 1 月 17 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。